

第17回日本IVF学会

2014.09.13-14、大阪

カルシウムイオノファ処理による受精補助症例の出生児調査

渡邊 千裕¹、水野 里志¹、大垣 彩¹、古武 由美¹、藤岡 聡子¹、森 梨沙¹、井田 守¹、福田 愛作¹、森本 義晴²

IVF 大阪クリニック¹、IVF なんばクリニック²

【目的】顕微授精後の受精障害症例に対し電気刺激、カルシウムイオノファやストロンチウム処理などの卵子活性化処理法による受精補助が行われることがある。しかし、これらの方法に対して児の予後を含めた安全性に関する報告は少ない。当院でも受精障害症例に対し、カルシウムイオノファ処理を施行している。今回、カルシウムイオノファ処理を施行した症例の児に対し出生児調査を行ったので報告する。

【対象及び方法】当院で2004年4月から2014年1月の間に体外受精を実施し、受精障害と判断された症例に対し、カルシウムイオノファ処理を施行し妊娠に至った11例13児を対象とした。この出生児に対して在胎週数、性別、出産時の身長、体重および先天異常の有無を調査した。なお、体重及び身長については在胎週数別に厚生労働省の平成22年度乳幼児身体発育調査と比較した。

【結果】平均在胎日数は男児 268 ± 10 日、女児 274 ± 0 日で、出生時の平均身長は男児 47.24 ± 1.84 cm、女児 48.0 ± 3.54 cm、平均体重は男児 2709 ± 401 g、女児 3068 ± 81 gであった。なお出生時の身長および体重は、男児1名を除いて、平成22年度乳幼児身体発育調査のパーセンタイル曲線内に収まっていた。性別の割合は男児84.6%（11児）、女児15.4%（2児）と男児出生の割合が高かった。先天異常については1児にダウン症を認めた。

【考察】今回の検討の範囲では、出生時の体重や身長にカルシウムイオノファ処理の影響は認められなかった。これまでの報告では、卵の人為的活性化実施した症例の出生時に男児が多いという報告はない。我々の検討では極端に男児の割合が多かったが、症例数が少ないため、この偏りがカルシウムイオノファ処理の影響なのかまでは結論付けることができなかった。ダウン症の発生についても同様である。今後、予後調査を続け、特に性比および奇形に発生について注意深く見守っていきたい。